

宮本武蔵全集

第四卷

冬樹社

定本 坂口安吾全集 第四卷

定価

昭和四十三年十月初版

著者 坂口安吾

発行者 滝泰三

印刷所 三容堂印刷株式会社

東京都千代田区神田錦町二ノ二

製本所 加藤三代治製本所

東京都新宿区早稻田鶴巻町二三番地

発行所 冬樹社

東京都千代田区九段南二の四の一四

電話東京(云三) 三四二一(大代表)

振替東京七五七

定本

坂口安吾全集

第四卷

監修

石川 淳

河上徹太郎

小林 秀雄

獅子 文六

編纂

奥野 健男

檀 一雄

平野 謙

福田 恆存

題字

石川 淳

第四卷
目
次

決 闘

淪落の青春

出家物語

ジロリの女

無毛談

遺 恨

アンゴウ

三十歳

ニューフェイス

お魚女史

9

25

43

58

109

118

130

142

159

172

織田信長

死と影

カストリ社事件

火

精神病覚え書

日月様

釣り師の心境

勝負師

行雲流水

わが精神の周囲

182

200

206

217

395

404

416

422

448

460

小さき山羊の記録

退歩主義者

484

肝臓先生

494

解説

奥野健男

519

座談の文体

加藤秀俊

535

解説

関井光男

542

小

説

IV

決 闘

妙信、京二郎、安川らの一行が特攻基地へ廻されたのは四月の始めであつたが、基地はききしにまさる気違い騒ぎで、夜毎夜毎の兵舎、集会所、唄う奴、踊る奴、泣く奴、怒る奴、血相変り、殺気だつた馬鹿騒ぎである。真剣をぬいて剣舞のあげくに椅子を真ッ二ツに斬りこむ男、ビールビンをガラス窓に叩きつける男、そうして帰らぬ征途につく。規律などは滅茶滅茶、酔つたあげく兵舎の窓をとびだして妓楼へ行く奴、町へくりだし情婦の家へくずれこむのは良い方で、女を押えつけて無理無体に思いをとげる奴、上官は見て見ぬフリ、士気があがっているからアバレル、血気がなくては敵の軍艦に突ッこめない、まるでもう当り前の顔でこう言っている。

妙信はこれ幸いとこの生活になじんだ。彼は淺草のお寺の子供で、お経の方は仕方なしに覚えなければ、清元と常磐

津は師匠について身を入れて習つた。喧嘩は強い方ではなかつたが、ミコシをかついで騒ぎまわるようなことが大好きだから、戦争は度が過ぎると思つたが、坊主はどうも虫が好かぬ。そんな性質だから、ピンタがなきや兵隊ぐらしも捨てたものじゃないなどと内々気楽に思っているところへ、特攻隊、まだ死ぬのは早すぎる、まったく暗い気持になつたが、ヤケ、ヤブレカブレ、飛行機のりになつた時から時々夜中に淋しさ、やるせなさで、ふいに首を突き起して思いきり怒鳴りたいような気持になることがあつた。愈々来たか、ダメか、と思うと一兩日は時々いわれなく疎むような、全身冷えきる心持に襲われたものであつた。

だから特攻基地へ廻されてきて気違い騒ぎを見ると、ハハア、みんなやつて、オレだけじゃないんだ、グロテスクきわまる因果物を見せつけられてそれが人ごとでない感じ、思

えわが身にせまる不安は身の毛のよだつものであったが、それと一しよに妙にゾクゾク嬉しく勇ましくなってきた。よろしい、オレもやるぞ、さっそく夜陰に窓からぬけだす、ピントがないから大いに豪快で、淫売宿にナジミもできたが、挺身隊の女工の情婦もでき、女事務員とも仲がよくなり、看護婦にも一人いいのができた。

安川は医者の方の三男坊で絵カキ志望の男であったが、この基地へきて、たまたま星野という未亡人と知りあった。星野家はこのあたりでは名の知れた古い家柄のお金持で、未亡人に一男一女あったが、長男は出征して北支で死に、まだ二十五の秋子というお嫁さんが後家となつて残され、あいにくのことに遺児がない。妹の方は十九でトキ子といった。

星野夫人は自分の伴が戦死のせいもあって、兵隊が好きで、特別特攻隊の若者たちに同情を寄せていた。

そこで行きずりの若い兵隊を自宅へ招いて御馳走するのが趣味であったが、誰でも招待するのかというと、そうではなくて、一目見て気に入らなければそれまで、気に入ると、街頭でも店頭でもその場で誘つて自宅へ案内する。そういうわけで星野家へ出入りするようになった兵隊が安川もいれて五人いた。

五人の兵隊がみんなトキ子が好きなのだ。元々特攻というものは必ず死ぬ定めなのだから、夫婦になる、そういう未来

のあるべきものじゃない。だから基地では一人の女を五人六人で情婦にする。そういう場合はまああったが、未来にどうという当のない身は磊落で鞘当ても起らない。

ハッキリ情婦となつてしまえば却つて鞘当てはないのだけれども、相手が処女、清純楚々たるタオヤメであるとややこしくなる。スヶガケの功名という奴があるからで、そこで五人が相談して、トキ子さんは我々のアコガレなんだから、胸にだいておくだけで汚さぬことにしよう。女のからだが欲しいければ商売女があるのだから、と約束したが、そのとき最も年長二十六になる村山中尉が口をだして、然しアコガレを胸に死ぬといえどキレイだけれども、四人死ぬ、最後に残った一人がどういふことも出来るわけで、そうなつては先に死ぬ者の氣持が無慙だ。だから特攻に出発ときまつた者だけその出発までトキ子さんをわが物とする定めにしよう。こう言ひ出したのは彼は中尉で編隊長であり、ほかの者、安川などはまだ一人前とは云えないような飛行機のりだから、自分がまっさきに貧乏クジをひきそうだからで、なるほど然し言われてみれば先に死ぬ者の氣持の暗さは無慙であるから、よろしい、そのために約束した。これは五人だけの約束で、トキ子も未亡人もあずかり知らぬところであるから、独裁横暴、いかにも勝手だが、眼前に見る祖国の壊滅、わが身の自爆、それを思えば彼らの心中も同情の涙を禁じがたい。

ところが皮肉なことに、この五人には、いっかな特攻命令が下りない。そのうち出撃もめったに無くなり、八月をむかえてから、にわかに二編隊十人、その中に安川がはいった。五人の中で安川が先陣ということになったのである。

この十人の特攻隊には安川たち三人組、死なばモロトモという仲良しの妙信と京二郎も含まれていた。

京二郎は他の隊員から変物と見られていたが、それは彼が無口で唄もうたわず酔った素振りも見せない、そういうせいではなくて、彼が女を知らないというせいしなかった。

まったく京二郎は女を知らなかった。妙信や安川が夜陰に兵舎をとりだして女を買いに行ったり、町の情婦を誘いに行ったりするとき、否、この基地へくる前から、京二郎は女の遊びにつきあったことがない。

然し、本来は至ってツキアイの良い奴で、ほかのことには誘われてイヤだと言ったことがなく、欲しくもない酒、見たくもない映画、なんでもつきあう。女のことだけが別で、妙信が自分の情婦の友達などを執り持つてやっても、発展したためしなかった。

センチな純情派、偏屈な童貞型、特攻隊の中でも童貞型がままあるが、京二郎はセンチでも偏屈でもなかった。人のことには寛大で、心には柔軟性があり、狭い純情型の正義派ではなかったが、オレはまア、ともかく女を知らずに死んでや

るさ、というどこか悠々としたところがあった。

いったいが、この男は、人々みんながやることはやりたくないような素振りで、ほかにべつに文句はないさ、というような頓狂な飄々たるところが、いかにも間のぬけた感じで、だから変物に見える。

然し京二郎は心中ひそかに、実は最も女が欲しい、女のからだが欲しかったのである。

とはいえ、恋がしてみたいと云ったところで、自分の一生が人まかせで、おまけに、いつ死なねばならぬか、もはや目の先に迫っているのだ。自由もなければ、自然も、意志も、実はない。懷疑すらも有り得ないのだ。

彼は死ぬのはイヤだ。切なかった。然しそれをどうすることもできない現実なのだから、酒と女に身を持ちくずして、ときのまの我がまま勝手をつくしても、それによって紛れるよりも、人によって殺される自分のみじめさが切なく思われるばかりに見える。どうせ殺されるなら、ソッと殺されよう、声も立てず、悪あがきもせず、そう思うと、いくらか心が澄むようだ。

どうせ祖国は壊滅する。英雄も軍神もありはせぬ。超人を信じ得ないということは、まことに死ぬ身にとってはつらい。まったく、もう、人間ではない。軍艦にブツカルためのエネルギーであるほかに全然意味がない存在であるというこ

と、この事実がぬきさしならぬことから、それを思えばグウの音もせず、ただボカンと、そして絶望に沈んで起き上がる由もないではないか。

とはいえ、彼とても、別に女にこだわることはないではないか、なぜ女にだけこだわるか、そう思うことは絶間もなかった。

すると又、あいにくなことに、最も欲するものを抑えること、せめてそれが満足である、いわばまアそれだけが人間の自覚のような気がして、そんな理窟で間に合うことも多かった。

だから彼はふだんイヤな士官だの司令の奴を、死ぬときまったらひとつヒッパタイテやろうなどという気持よりも、誰にでも愛想よくサヨナラと云って、サッサと死んでしまう方が気に入っていた。

然し愈々命令が下ったときには目も耳もくらみ、心は消え、すくんでしまったもので、ああ、これを絶望というのだ。絶望とは決して人間の心に棲むものではない。狂気の上にあるものであり、人間に非ざる心に在るものであった。

突然京二郎は全宇宙を砕きたい怒りに燃えた。すると又にかにもはや又絶望、喪失と落下と暗黒と氷結にとざされてゐる。すると又、にわかに怒りに狂い、又喪失と落下と暗黒。そういう繰返し波がひいて現れてきた自分も、然しも

う先程までの自分とは違うような、なぜとも知れずハッキリ分る差の感覚が、まことにイヤらしくこびりついているのであった。

*

その日のひるまは三人そろって町へでたついでに、星野家へ挨拶に立ちよった。妙信と京二郎ははじめての訪問で、ちよつと上ってお茶をのんできただけだった。

その夜は集会所で送別会がひらかれ、例の如き気違い騒ぎ、他の隊員には血相変りただらぬ者もいたが、三人組はふだんの通りで、妙信は清元をうなりカッポレを踊り、次には素ッ裸でヤッコサン、京二郎は例の如く全然黙々たるものであり、安川も途中まではふだんと変らなかつたが、村山中尉が酔っ払ってやってきて酒をさして、

「ヤイ、貴様が先陣とは面白い。立派にやれ。ひとつ、のめ」

横柄であつた。むろん階級の差も年齢の差もある。無礼講もその差は一応当然でカンにさわる筋はなかつたが、二人のつながりは軍人としてではなしに、人間のものです、そのつながりの上だけの交際なのだから、安川は急にビリビリ緊張した。

安川はひるま挨拶に行つてちよつとお茶を飲んできただけ

で一応気持は済んでおり、約束をたてにトキ子のからだを強要できることなどはやこだわらずに始末のできる気持であつた。

然し村山の横柄な態度のうちに、どこか残忍な、我慾のためには他をかえりみぬ性格をよむと、こいつの場合には是が非でもやる、トキ子さんが泣いてイヤがっても振じふせやりとげる奴で、その不安は以前から胸にあつたが、目のあたり見なければそれで済んでいられたのである。

安川の眼つきが変つた。酒盃をテーブルへ置く手までふるえて、立ち上るから、

「貴様、オレのついで酒うけないのか。無礼な奴だ」

「何が無礼だ。オレはこんなカラ騒ぎの席にいたくないから引きあげるのだ。約束を果してくる用件もあるからな」

素ッ裸の妙信が、

「おツとツと。待つてくれ。オレも一しよに退散する。オレもひと廻り廻るところがあるのだから」

軍服をきて一しよにでる。京二郎もあとにつづいて出た。

辻へきて、妙信は別の道へ別れるというので、

「君はどうする。当がないのだったら、オレと一しよに星野のうちへ来ないか」

「オレが星野のうちへ行っても仕方がなからう。このへんをぶらぶら歩いてみよう。妙になんとかなく歩いていたいのだか

ら」

「そうかい。なんとなく君にも来てもらいたい気持なんだが、じゃア、仕方がない」

二人は右と左へ、京二郎はあとへ戻りかけると、安川がふりむいて、

「おい、くることができないのか。一しよにくる気持にならないかな」

「ならないな、別に当もないけれども、今夜はもう今夜ぎりじゃないか。思うようにしてみるほかに仕方がない」

「そうか」

京二郎が一しよに来てくれないせいでと安川は思った。このままで行くと、どうしてもトキ子を手ごめにするものになる。決意とも違つてヤケクソ、捨て身、そういうものだ。それを警戒して誘っているのに京二郎が来てくれないから、どうしても、そうならずにいないだろう。こんなふうな甘えたようなヤケな気持で遠い昔に道を歩いていたことがあつたような気がする。幼いころ、母に甘え、母に怒り、そういうヤブレカブレで。

トキ子の母に会いトキ子に会うと、気持は別人のように落付いていた。然しトキ子を散歩につれだして町外れの河原へでると、ふとした情慾の念をきっかけに支離滅裂な逆上が起つた。嫉妬かと思えば絶望であり、あらゆるものへの呪詛と

破壊を意志したときには一途の愛惜に目のくらむ思いもして
いる。

安川はトキ子をだいていた。

「あなたとこのまま別れては、僕は死ぬことができないか
ら」

どうもこいつも、こんな言葉でこんなことをするのだろ
う、と安川はイマイマしく思ったが、もはや何物をも顧慮す
ることができない。そして彼は自分のどこにもブレーキがな
いので驚いた。否、驚くひまもなく、実行的な行為とそれを
やりとげる力だけが、それだけが自然のように次々と起り溢
れた。それはまるで芸術の至高の調和のような充実した力量
感と規律的なリズムをみなぎらしているようであった。

トキ子はさからわなかった。ただ地の上へ押し倒されたと
き、ああ、というウツロな声をもらしただけだ。安川の悔恨
はその声の回想から起った。恋でもなく行きずりの愛情から
でもないのだらう。あなたとこのまま別れては死にきれない
と云う、それだけの呪縛であり、祖国のためにイノチをちら
す若者へのこれも祖国のイケニエの乙女の諦念にすぎないで
はないか。

彼はこの思いをつとめて抑えていたが、集会所をとびだし
て夜道へ降りて以来、なぜトキ子を手ごめに行くか、嫉妬に
よってならば村山を叩き斬るべきで、それによってトキ子を

手ごめにするのではない、そういう声をきいていた。

村山を叩き斬れば祖国のために死ぬことができなくなる。

だから仕方がない。トキ子が自分のようなものとながりを
持ったのも、自分が祖国のために死ぬという定めのためによ
ってであり、これだけは如何なる絶望逆上混乱をふみつぶし
ても為しとげねばならぬ。すべての特攻隊がそうしており、
村山にしても、彼もやっぱりトキ子ですててやがては征かね
ばならぬ、又、征く、必ず征く筈だ。

そう思えば、どうしても手ごめに行くより仕方がない。約
束なのだから、約束を果さないセンチの方が卑怯だなども
思った。

然し思いを果して何が残ったかといえば、祖国の名に於て
純な乙女をイケニエにしたという後味の悪さばかり、起き上
り、立ち離れて茫然と立ちすくんでいると、トキ子も起き上
り精神的な混乱と肉体の苦痛で歩くことも容易ならぬ様子で
あった。そこで再び悔恨が胸につきあげて逆上すると、祖国
の名に於てイケニエになるのはトキ子ばかりではない。自分
のイノチがそうではないか。トキ子が何物であるか。自分の
場合はイノチが自分のすべてのものが。それを思うと、絶望
ばかりであった。むしりと、むしりと、目をふさぐ
絶望の暗幕をはぎとることができないではないか。
「トキ子さん。立派に死んでお詫びをします」